

リコー三愛グループ

三愛会会誌

No.128/2001

JAN-AI

特集：やってみようかな？ボランティア

心の豊かさとは ボランティア

弁護士
さわやか福祉財団理事長

堀田 力

1 幸せは、心の豊かさから生まれる

ボランティア活動も、ほかの活動と同じように、幸せになることを求めている活動である。

では、幸せとは何か。

幸せとは、満足感であり、満足感は、欲求が満たされたときに生まれる。

では、人の欲求にはどんなものがあるか。

欲求の分析で有名な心理学者マズローの五段階説をごく簡略化というと、もともと基礎的な欲求として、食欲などの生理的欲求があり、第二段階が安全への欲求、第三段階が愛情への欲求、第四段階が尊敬への欲求、最上位の段階が、真善美などを求める自己実現の欲求である。

第一段階と第二段階の欲求は、動物のすべてが持つ、生きていくための基本的欲求であり、この欲求を満たすのは、衣、食、住などの物質が主である。モノの豊かさがあれば、これらの欲求は

満たされ、幸福感を味わえる。

第三段階の愛情から上の欲求は、いわば精神的欲求であって、上位になるほど、人間特有の欲求になる。自己実現を望む動物は、人間以外には考えにくい。そして、これらの精神的欲求を満たすのは、自己の努力と、これに応じる周りの人々の関係であって、モノではない。自分と人々との心豊かな関係によってこの欲求は満たされ、幸福感を味わえる。そして、その欲求はモノによる生理的な満足感と違って、満たされてもさらに高次元の満足感を求める奥深いものである。人につくることがない幸せをもたらすのは、心の豊かさであるといえよう。

2 心の豊かさをもたらすのは、 無償の活動である

生理的欲求を満たす衣、食、住その他のモノを供給するのは、経済活動と、行政を主とする公共

団体の活動である。

これに対して、精神的欲求を満たす活動は、自分自身の努力と、人々が無償で提供するサービスや心情である。たとえば、第三段階の愛情や第四段階の尊敬は、お金では買えず、行政も提供できない。

第五段階の自己実現は、特に本人の努力が必要で、その過程でモノが必要になる活動もあるが、自己実現が完成するのは、人々がそれを評価する時である。たとえば、ピアノの演奏による自己実現を例にとると、自分を表現できる演奏を行なうには、たゆみない努力が必要であり、ピアノというモノが必要であるが、演奏による自己の実現が完成するのは、人がこれを聴き、認知した時である。その技術が比類なくすぐれている時は、演奏活動を経済活動として行なうことも可能になるが、一般の人々の場合には、その域に達せず、無償の活動となる。

真、善、美、その他の価値を追求し、その中に



ほった つとむ
堀田 力氏 略歴

1934年、京都府に生まれる。58年、京都大学法学部卒業。59年、司法修習生、61年、検事任官。札幌、旭川、大津の各地検勤務を経て、65年、大阪地検特捜部検事、大阪タクシー汚職事件等を担当。67年、法務省刑事局付検事、財政経済事件等を担当。72年、在アメリカ合衆国日本大使館一等書記官（後に参事官）。75年、法務省刑事局参事官。76年、東京地検特捜部検事、ロッキード事件等を担当。80年、東京地検特捜部副部長、ロッキード事件等を担当。83年、法務省刑事局総務課長、84年、法務大臣官房人事課長、88年、甲府地検検事正、89年、最高検察庁検事、90年、法務大臣官房長、91年、最高検察庁検事を歴任。91年、退職。弁護士登録をして、「さわやか法律事務所」「さわやか福祉推進センター」を開設。95年、「さわやか福祉財団」設立。

著書に、「否認」「再びの生きがい」「おごるな上司」「学問はどこまでわかっていないか」（以上、講談社文庫）、「悔いなく生きよう」「壁を破って進めー私記ロッキード事件」「これから人は何のために生きる」（以上、講談社）、「心の復活」（PHP研究所）、「あきらめるな！ニッポン」（実業之日本社）、「心の自立」（法研）、「生きがい大国」（日本経済新聞社）などがある。

自己の感性や知性、人格を現す行為は、その基本的性質として、営利を目的としないという特徴がある。言い方を変えると、心の豊かさは、自己及び他人の無償の活動により、実現されるといふことである。

3 ボランティア活動は、心の豊かさを満たす活動である

精神的欲求、つまり、心の豊かさを満たすのは自己及び他人の無償の活動であるが、人々が行なう無償の活動には、家族や友人、近隣の人々などの援助・交流活動、宗教活動、政治活動（政治的信条を訴える行為や、これを支援する行為）、趣味の活動、それに、ボランティア活動がある。

現に行なわれているボランティア活動をみると、福祉にせよ環境にせよ国際活動にせよ、企業

も行政もサービスを提供しないからこそそれらの活動が行なわれている。たとえば、福祉の分野でいえば、介護保険制度によるサービスによっては満たされない淋しさをいやすための散歩や食事などによる心の交流、環境の分野でいえば行政の予算ではまかなえない美観保持活動などである。それらの活動は、活動の相手方あるいは一般住民に、精神的な満足感をもたらすと共に、活動する人たちに、自分の能力を生かして、人や社会に役立つたという精神的な、満足感をもたらす。これが、賃金あるいは利潤という報酬に代わる、ボランティア活動の報酬なのである。

ボランティア活動の中には、災害時における救援活動や、発展途上国における技術指導、学校建設など、市場や国の行政機構が機能していればそれによって提供されるべきモノやサービスを提供する種類のものがある。これらの活動は、市場や

行政がそのサービスを提供できる状態になるまでのつなぎとして行なわれるのであり、その活動もたらすものは、モノの豊かさなのであるが、提供する側が得るものは緊急事態、あるいは貧困状態にある人々を救ったという精神的満足感である。

4 ボランティア活動は、生きがいと人間的成長をもたらす

ボランティア活動はこれを行なう人に精神的満足感をもたらすから、そこに生きがいが生まれる。自分の能力を発揮し、それによって人が喜ぶ結果をつくり出すのであるから、自分が存在していることの社会的な意義を実感できる。その感覚が生きがいなのである。

逆にいうと、生きがいを実感するためには、そ

の活動が自分の能力に適していることが必要である。

人はさまざまな能力を持って生まれ、また、生きる過程でさまざまな能力が目覚めるが、それらの能力のうち、経済活動に生かされ、報酬の対象となる能力は、限定される。しかし、それ以外の能力であつて、それを生かすことが心の躍動感をもたらすものが、必ず、ある。たとえば、医師の日野原重明先生は、八九歳にして、「葉っぱのフレイド」のミュージカル化のシナリオを書かれたし、かつての経営者、今経済・社会評論家の大前研一さんは、サントリーホールを満席にしてオーボエの演奏をしておられる。俳優、タレントで玄人はだしの絵を画く人も少なくない。俳句をつくる人の職業も、実に多彩である。

最近の小・中学校には、地域の人々に○○名人、××達人などの称号を与え、放課後の子どもたちにさまざまな技能や知識を教える仕組みをつくるところがはじめているが、地域には、実にいろいろなることを教えることができる人がいるものだと言われる。

生きがいを実感できるボランティア活動さがある。だから、自分さがしなのである。

自分が自己を実現する喜びを感じる活動は何か。

自我が芽生える思春期のころ、どんな活動に憧れを感じたか。

その青春の思いを生涯生かす生き方が、私は、精神的にもっとも充実した人生を送る道ではない



かと思っている。

そのようにして、生きがいを感じる事ができる活動を見付け出し、その活動の中で、自分の中にある能力を新たに生かし、あるいは、思い切り伸ばす。それがそのまま自分の人間的成長をもたらす。そうして得た自信は、ボランティア活動だけでなく、仕事の面でも家庭の面でも充実をもたらずである。

5 ボランティア活動は、 経済活動と両立する

「ボランティア活動もしたいんだけど、仕事が

忙しくて」と言う人が少なくない。その人は、仕事に忙しくて、家庭生活もせずに、テレビも見ず、趣味の活動（ゴルフとか読書とか）もせず、酒や料理を楽しむこともしていないのだろうか。一生に何度かそういう仕事をする時もあるであろうが、それは一時期の話である。ボランティア活動は、すでに述べたように、家庭での活動や趣味、宗教などの活動と同質のものであり、それを求める心があれば、どんなに仕事が忙しくても、それに対応にやることが出来るものである。にもかかわらず、仕事を理由にやれないというのは、頭でやろうと考えているだけで心ではそれを求めているいからであろう。

心がそれを求めない原因は、未知の人々と未経験の活動をするおっくうさや、収入をもたらさない活動にエネルギーを投入することが損だという感覚など、人によって異なる。いずれにしても、その人の生き方の選択肢の中で、ボランティア活動が、おっくうさや損だという感覚などを克服するだけの魅力を持っていないからだといえよう。

しかし、頭ではボランティア活動してみたいと考えている場合には、ためらう自分の心に対し、自分の生き方を問いかけてみるとよいと思う。

「自分の生き方は今のままでよいのだろうか。仕事からリタイヤした時、自分は何をして生きるのだろうか。」

自分が生きてきたというあかしと満足感を得るには、何をすればいいのだろうか」

人は、自分を生かして充実した人生を送りたい

という本能を持っている。自分のその本能がその間いかけによって目覚めれば、心は必ず動くであろう。

心が動けば、仕事が忙しくてもやりたいことをやる時間は生み出せる。

6 サラリーマンに適した ボランティア活動はたくさんある

一番簡単なのは、気持ちを動かされた活動に対する寄付である。テロに怒れば被害者の遺児支援活動に寄付し、アフガンの無辜の民の災難に同情すれば、その救援活動に寄付する。損をした気分もするが、それ以上に、その活動が身近になり、自分がなにかしかならがあるが、参加し、役立った気分が味わえる。この「自分が生かされた」という満足感が、寄付の報酬である。

もう少し進むなら、その活動の意味を人に説き、寄付を集めてあげるとよい。人との連携感が生まれる。酒飲み仲間や仕事の仲間以上に、生き方の共感を軸とする仲間は、心地よい。

自分が行動で参加するとすると、仕事の時間が制約となる。

前へ進む道は、気持ちが動く活動をしている組織とつながることである。その組織の活動ぶりを見、組織の発行するパンフレットなどを読み、リーダーや活動者と話してみる。そして、自分が出来ることを披瀝する。すると、仕事の時間にくい込むことなく出来る活動が見付かることが多い。

パンフレットなどの記事を書いてあげる、会計処理の指導をする、土日に担当者にパソコンを教える、土日や夜のイベントを手伝う、会員や支援企業を紹介する、組織運営についてリーダーにアドバイスするなどなど。

子どもが好きであれば、学校に協力して、夜、あるいは土日に子どもたちに教える（パソコン、スポーツ、得意な学科、社会体験、悩みごと相談、何でもよい）、スポーツやキャンプなどの指導、おもちゃ作り、本の朗読、紙芝居、歌、小さなお芝居などなど。

地域の活動、文化財の保存、美術館の説明、自然保護活動、在日外国人の支援、高齢者や障害者の支援、町づくり、政策提言など、どの分野にも、仕事以外の時間で出来る活動がある。

やる気になれば、情報が得られ、自分を生かす道が拓ける。

7 社員のボランティア活動は、 企業にとつてもメリットが大きい

社員がボランティア活動によって人間的に成長することは、その企業活動の質を高める。仕事への意欲、ゆとりを持って社会的な観点から仕事を客観的に評価できる眼、人間的包容力、接渉力、前向きな人間関係をつくる力など、社員のいろいろな能力が高まる。きわめて効率のよい研修を、時間外に、自己負担でやってくれるようなものである。

そして、その活動は、企業の信用力を地域で高める。費用のかからない広報である。

さらに、その活動は、意欲と能力を持った若者たちを、その企業に引きつける。最近職を求める若者たちのうち、企業の戦力になるような人たちは、会社人間となつて出世、昇給することではなく、仕事の中にも生きがいを見出したいと望んでいる。自己実現が彼らの就業の動機なのである。だから彼らは、時間外にも、自分を生かして人や社会に役立ちたいと望んでいる。そういう人材を採用する企業は、将来性が高まる。

8 ボランティア活動は、 家庭を明るくする

親がボランティア活動をしている家庭からは、非行少年や家庭内暴力少年、とじこもり少年などは、まず生まれにくい。親の生き方が子どもたちの心を健全にし、会話も生まれる。

ボランティア活動をしている夫がリストラにあった時、妻の動揺は比較的少ない。出世と給料以外の生きるための価値観を夫と共有しているからである。

そして、ボランティア活動をしている本人は、経済社会の外に生きがいを持つて活動があることを知るから、収入が乏しくとも充実して生きることができるといふ自信を獲得する。経済の先行き不透明な時代、この自信は、日々の生活から不安を追い払う最高の力となるであろう。